
戦国WAKABA！

雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国WAKABA！

【Nコード】

N5855P

【作者名】

雪子

【あらすじ】

時は天正19年（西暦1591年ごろ）、豊臣秀吉によって日本統一がなされたばかり。戦国時代と名に相応しく戦い続いたこの時代、人々の憎しみと悲しみで怨霊が各地で発生。霊的ないざこざが絶えなかった。そんな中で、甲賀の忍び、猿飛佐助が真田幸村と出会うことによってはじめる、戦国伝奇小説。愛と葛藤の青春ストーリーで、ただいま参上！

第一話 出会い〜すべての始まりはここでしたね、幸村様〜（前書き）

道なんか、まるっきりわからなかったという。

私に会うまでは、この幼子は生まれたての獣のごとく、ただひたすら闇をかきわけて突き進むだけだったと言っていた。

「俺を雇わないかい、海野殿……それはまったく違うか。あんたの魂は武田のものだし……いや、真名である真田信繁殿といったほうがいいか？」

黒曜石の瞳を妖しく光らせた六つの歳も満たない幼子は、後に己の唯一無二の『主』となる男の魂に向かって抑揚もなく話しかけてきた。

第一話 出会いすべての始まりはここでしたね、幸村様

時は天正19年（西暦1591年ごろ）、豊臣秀吉によって日本統一がなされたばかり。戦国時代と名に相応しく戦い続いたこの時代、人々の憎しみと悲しみで怨霊が各地で発生。霊的ないざこざが絶えなかった。

昨年初陣（表向き）を果たし、今は京都にいるはずの真田信繁（真田幸村）が甲賀にいる理由もそのせいである。

彼にとってみれば 人の摂理で解決できるものではない、異形のものたちとの戦いは人質時代から続いているので、別段おかしくはない。

むしろ日常茶飯事なので驚きも、妖しいと思いつたのだが 黒曜石のような鋭く闇色の瞳をもつ、忍びの里の幼子には面をくらっていた。

「君は、私の魂が見えるのか。いや、君は魂しか見えないのか」

「？」

どうやら、この幼子は魂に刻まれた名を呟いただけのようで事の重大さには気がついていない。

そこらへんは子供の率直さ、というべきだろう。人には見えないものが見えるその目をもっているために里のものに気味悪がれているのだ。

五歳児にしては恵まれた才能と素質の忍びで、忍者としては大人顔負け。一応仕事をこなせるという証としてこの忍者を育て上げた師は名を与えたというが、子供であることと一癖あるので使いにくいと評価されている。

「ああ。道理で……」

その里の者たちの意見は正しい。信繁の魂を一発で見抜ける能力を

持つ子供ならば、異形のものさえも容易く見て取れるだろう。

こんな人の世では疎まれる能力も持つものに対して例えば子供だろうと疎遠になるのが、普通の人としては当たり前で。もしこの子供に魅入ってしまったのならば、異界への扉が開かれるというもの。

「この子を磨き上げるには、この里の者ではいけないね」

「真田様？」

「しつ。今はその氏を言つてはならない。今の私は海野六郎。京の都では稀代の退魔師として活躍しているフリーの陰陽師。猿飛佐助、氣にいった。今日から私は君の主となろう。佐助が私に声をかけてきたのは、それを望んでいるからなのだろう」

「……はい」

飯にありつくには、これ以上の方はないという勘からだたと、甲賀と契約をし、晴れて里を出た佐助は主人に無邪気に述べた。

物々しい言い方をしたくせに、なんとも単純な理由だった。

されど、佐助の勘はこれから頼りになる重大なものであって、そのたびに幾度となく危機を回避するのに役に立つ。

この子はきつと……。

信繁の視界が急にグニヤリと曲がる。ぐらつく地面と景色……のだが、恐怖などない。先ほどまで感じていなかった暖かなものが身体全体を安心させる。ああ、これはうつつし世のものではないのだと、寝惚けた頭が理解する。

そして、この事実と感覚が現実へと信繁の意識を戻していった。

「……ん、やはり夢か……ふむ」

一つ、二つと瞼を開いて、布団から上半身を起き上がらせる。まず目に付くのは信繁の隣でスウスウと寝息を立てる小さな山が一つ。

甲賀の里から忍者を雇うというか、拾い上げてから数日。信繁は城下町に来たので、昨日は床のある部屋に久しぶりに眠ることができた。

朝日によって目が冴え、ちゅんちゅんと雀がさえずる音で起きるのも久しぶりだ。

「まあ、今のところは掘り出し物を拾ってきた、という気がするな……」

忍者として名を与えられていても、佐助の子供独特の柔らかい髪の毛は手触りがよく、さらりと梳ける。

「はう。いきなりどうしたのですか、海野様」

「あ、いや、おはよう、佐助」

「あ、おはようございます……て、そうじゃなくて、どうして急に！」

気持ちはいいがいきなり触られるのは抵抗があるというものの。臆病な生き物であればあるほど、気が立ってしょうがない。

「ちょっと、出会ったばかりのことを夢見て、な。それと、今日は真田信繁のほうだから、真田様のほうで」

「もう、主様はややつこしいです。どうしてそんなに名が多いのですか！」

「いろいろと大人の事情というものがあってね。私も慣れるのに苦労したよ」

「俺は真田様の忍びですから、真田様に合わせますけど」

飯のために、である。

佐助は忍者としては正直すぎる。

もつとも生きる術として甲賀の里の者たちはすべての子供に技術を教えているものであつて、一人前の忍者となるとは別の話である。

甲賀の忍びとしては、佐助の能力と性格は疎まれる。

ならばと、真田忍軍の長にもなれるようにと教育されてきた真田家の次男坊は、佐助を今は小姓のように、悪友のように側に置いた。そしてこの子供を己の右腕になるように育てる気である。

（忍者としてか、退魔師としてか……）

どちらにしても佐助ならばいい部下になりそうだ。

「で、今日はどういった事情なのでしょうか」

身なりを整え、宿を出た佐助。今は武家の子供のようなきちんとした羽織袴で歩いている。里から出た当初の衣服は風呂敷の中。動きやすい忍者服であるが、今日向かうところでその衣装はさすがに無礼なので、持っけていてもいいが着てはいけないといわれた。

「ん、今日は入城するぞ。気後れするな、佐助」

「に、入城……って、この城に、ですか！」

「そうそう。私に海野六郎という名と、ややっこしい役割を与えたお方だ。甲賀の里で新しい部下をスカウトするように進言したお方でも、あるな」

「ということは、海野様の生みの親、ということですか？」

「そういうことになるかな」

「俺と真田様を出会っかけを与えたお方か……どんな方なのだ

ろう。楽しみです」

無邪気に微笑んだ顔は歳相応のものだった。

越前敦賀城。

信繁と佐助は城門から実にスマートに客間に通された。城のほとんどの人もいつものことだといわんばかりにほいほいと彼らを上げらせる。

「すいぶん慣れているようですね、真田様」

用意された甘い茶菓子を、目をキラキラさせながら食べながら、勤めて冷静に状況を把握しようとする幼児忍者。

「いつものことだからね」

甘味が好物である信繁も何の遠慮もなく菓子に手をつけている。

「それに、佐助なら見えるだろ、この子達を」

空をなぞるように指を向ける先にあるものを指した。

「蝶のことですか。それにしてもこの城は蝶が多いですね」

城に入ってから佐助は蝶を何匹も見ていた。金色の鱗粉におおわれた漆黒の四枚の大きな美しい羽をもつ蝶たちが、まるで二人を歓迎するかのように舞っていたものだ。

それに客間にも一匹入り込んで羽を休ませている。

「この子達は普通の蝶じゃないよ。念によってできた、異形のものたち、『式』だよ」

「この蝶が、ですか！ 本物そっくりじゃないですか」

「蝶の姿を借りているとも、偵察用に念を具現化させたらこの形が一番安定していたとも、どちらが真相かわからないけれど、この子達の飼い主は私たちと同じく能力者だ。そして、私に退魔師として京の都で悪霊退治をするように言いつけたお方」

信繁自身は悪霊を払う能力があることはわかっていたが、見抜かれて、しかも京のお偉いさん方のためとはいえ人質の自分をつかって

悪霊退治をさせるとは思いもしなかった。

屋敷に見張りを立てられてじっとしているよりは性に合うし、己の槍捌きを困った人たちのために振るうのは義務であり、至福だ。恨み言はないのだがいくらなんでもフリーダム過ぎるのでは当時は思っただものだ。

羽を休ませていた蝶がひらひらと飛んでいくと同時に、スウツと襖が開かれる音がした。

「よく来たね、ユツキー」

多くの蝶を引き連れて、件の人はやってきた。

「ひさしぶりです、刑部殿」

「うわあゝ」

佐助から感嘆が漏れる。

この幼子に目に映るのは、白い衣を重ね凜と背筋を伸ばした、男性としては細くしなやかな体つきの蠱惑的な美しい人だった。切れ長の目には常人では白い部分であるはずの部分が周りを囲む蝶よりも妖しく美しい漆黒となっていて、さらに奥の瞳には紅玉のような輝きが宿っている。

「綺麗な人だな……。常夜の君に愛されているからですか」

「あ、こら、佐助！ 申し訳ございません、刑部殿」

「ふふふ。大変面白いことをいう。いや、佐助君のいうことは理に適っている。だからこそ蝶たちが僕を守ってくれるのだから。間違いないよ」

しやなり、しやなりと、鈴の音が鳴る。どうやら服に鈴を縫い付けているらしい。その澄んだ音は穏やかな夜のような安らぎを与える。

「それに靈視をすれば、僕の姿は今でもそう見えるものだから……ね……」

そつと、白い指先が佐助の顔に触れ、顔を上げさせる。幻想的な赤と黒の目が交差し、じつと見つめてくる。

「？」

美しい人に見られること苦ではないが、なんとなく照れくさい。

「佐助君は生まれてからずっと靈視している状態のようだね……。いや、普通の人の目になれない、のか」

「それはっ！」

「僕たちは、人の目に靈的な力をこめて靈視をする……。早い話切り替えることが出来る。が、佐助君は靈視しか出来ない。人ならざる者たちと同じ瞳だつてことだよ。それとも、人としての目の機能が何らかの事情で失つてしまったのかな……。ねえ、佐助君、甲賀の忍びとしてどんな辛い修行をしたのかな」

「辛いつて何ですか？」

「……どうやら、十中八九修行中に人の目をほとんど失つたね」

「そうなのですか。まあ、俺は気にしていませんけど」

「知らない同情はしなくてもいいと、言っているのか。忍者として育てられた佐助はあくまでも自分の技術に目をかけるだけでよいと幼心に刻み込み、商品としての価値で評価されたいという心構えだった。

「……ふう。まだまだ世知辛い」

蝶の主は立ち上がり、中庭まで歩く。

「あ、刑部殿」

「ついてきてくれないか。そして……佐助君。君の力を僕に見せてくれ」

シャナリ。

鈴の音が止まった場所は……御前試合でも使用できる広さと平らな場所だった。

「刑部殿！」

流石に信繁は、その考えを改めるように声を荒げる。

「フフフ。別に佐助君が嫌いだというわけではないよ。蝶を通して、ここに来るまでの君たちの行動はちゃんと見ているし。ただね、僕は佐助君を試してみたいのさ。それはお互い、今後の役に立つだろう」

無数の蝶を手招きし、常夜に愛される闇の術者は戦闘体勢をとる。

「す、すごい……、刑部様」

膨れ上がる、圧倒的な力に佐助の小さな身体は身震いした。

そして、切に願ってしまう　この人と戦ってみたいと。

「う、期待する目で私を見るな、佐助っ」

命令を欲しているのだ。

契約上、佐助の主人はどんなことがあるうとも信繁ただ一人。彼の許可がなければ、力を奮うことは許されていない。

「まあ、ユツキー。そう堅く考えなくとも。能力者はどうしても相手の力量を試したくなるものだ。原始から続く血脈のせいかな、それともただの闘争本能か……僕も久しぶりにうずうずしてきてね。ちよつと身体を動かしたくなってしまっくらい、佐助君に宿る力に興味を持っている。なあに、すこしじゃあうだけというだけで……」

「そのじゃああいというものが本気にならないのでしょうかね、刑部殿」

「……」

微妙な間

「善処はするよ」

それはもう、とてもいい笑顔だったという。

嘘だ、と叫びたくなるが……。結果的に信繁は折れることになる。なぜなら、彼は刑部こと大谷吉継に逆らえる立場ではないからである。

おまけ 戦国WAKABA！ キャラクター

大谷吉継・・・主君である秀吉や親友である三成に無理難題を押し付けられることが多いとぼやく、刑部（官位名）。天正19年時点では越前敦賀城主。業病（あえて当時の病名で表記しています。他意はありません）発症。だけどそれほど病は進行していない状態なので、普通に歩いている。（史実でも次の年の戦いに参陣しているし）

六郎に魔物退治を依頼するのは主に彼。敦賀城主なのにご苦労なことである。彼自身も異能者で、能力は強力だが、相性の問題で退魔

には少しむかない。闇属性。式である黒蝶とは視覚が繋がっている。生誕は1565年説（【兼見卿記】の天正二十年一月三日の条に、東殿子息刑部小輔廿八歳、とあることから（数え年です））のほうを採用。ということで、現時点では26歳なのだが、普段は落ち着いた大人のためか、31歳の三成や同じく年上の豊臣子飼衆よりも年を取っているように見られる。佐助と妙に気が合う。

大谷さんの容姿、能力については、文章上は佐助の目同様、霊視フィルターによって、これからも表記します。（どこまで病が進んでいるか、確固たる確証がないため）

一人称は『僕』。『戦国RINNE!』では設定上、出演が絶望視されているキャラクター（笑）。

まあ、RINNEのヒロインのご先祖様なのだから、しかたがないってことで。

佐助と信繁（幸村）に関してはRINNEのほうで取り扱っているものと大差ないので、詳しく表記しません。

1591年時点

海野六郎・・・京の町を牛耳る、売れっ子退魔師。本名は真田信繁（幸村）。甲賀の里にて佐助と出会う。転生者で、前世の名は武田信繁。24歳

猿飛佐助・・・主役（これだけは譲れない）

甲賀の忍。驚きの5歳児。実は極端に目が悪い（完全な盲目ではないが、光を感じる程度しか反応できない）けど、霊視で視覚を補っている。

第一話 出会い〜すべての始まりはここでしたね、幸村様〜（後書き）

と、いうわけで……書いた、書いた、時代物〜 ヒャッホ〜イ！
このネタは使いどころが難しくてお蔵入り寸前ということと、『戦
国RINNE!』の宣伝をかねて、掲載してみました。

これを機に電子書籍パピレスの小説（いるかネットボックスで発売
中）のほうも読んでいただければ、雪子（Yukiko）的には嬉
しいんですけどね。

このWAKABA!は、早い話、スー マソで言うところのヤ
グスー マソ風な話に仕上げようと考えているので、佐助がいか
に成長していくか、がメインテーマです。

だから、RINNEとは別物。完全オリジナル展開……ゆえにオリ
ジナル小説です。

愛と葛藤の青春ストーリー……になったらいいな、と思っています。
では、続きましたら、よろしく願います。

第二話 常闇に愛されている術者ゝ力は使う者の心構えによって多彩の色を放つ

黒い蝶が羽ばたき、金色の鱗粉をふりながら主の下に集まってくる。
天高く上る日の光が彼らのキラメキをより優美に上品に引き立て、
目がくらむような夢幻の世界を築き上げ、

「さあ、君は僕の法にどこまでついてこられるのかな」
展開する。

見たことも聞いたこともない幽玄の世界を体験することとなる佐助
は、圧倒的な力による恐怖よりも、常夜の寵愛を一身に受け優雅に
蝶を舞い侍らせる術者の美しさに胸を躍らせた。

第二話 常闇に愛されている術者ゝ力を使う者の心構えによって多彩の色を放つ

敦賀城の中庭。

ただいま絶賛、異世界的展開中……となっていてしまっている場所である。

「佐助、無理はするな！」

相手をしてもらいたいと許可はしたものの、信繁は怪我をしないように注意した。

「はい、真田様」

「あと、手加減は一切するな。手加減できるほど刑部殿の力は甘くない。下手をすると死ぬからな！ 私は三日三晩生死の境をさまようことになった！」

経験者は語る、である。

「……刑部様、そんなことをしたのですか」

「大丈夫だよ、佐助君はちゃんとこの世に戻すから。当時はまだ力の加減と蘇生がうまくいなくてね、ユツキーにいらぬ苦勞をさせてしまったけど。今なら、連れ戻せるよ」

あの世から。

「……」

こんなところで臨死体験をする気がないので、始めから本気を出すことにした。

佐助は入城してきたときの服装から、里から持ち込んだ忍者服へと着替え、身構える。

風が吹き、ゆらりゆらりと木の枝についていた葉が中庭の池に落ちる　　パサリ　　ほんのわずか音だった。

張り詰めた空間に波紋が広がり、鏡のように透き通り真っ直ぐだった水面が乱れる。

「はっ」

佐助のクナイが吉継の眉間に真っ直ぐ向かってくる。

そして続けさまに三本を右に、四本を左に、交差するように、心臓と中心点に×を描くように投げ込んできた。

バサバサバサッ。

蝶たちは、主を守るため、身を挺してクナイを止めようと向かってきた　　が。

ボフッ。

クナイに触れた刹那、黒い蝶の存在が掻き消される。

「ふむ。破邪の力、か」

術を無効化にする力の総称である。ただし、術の形成上に必要な何に反応して打ち消しているのかまでは、予想が出来ない。

術を構成しているエネルギー自身を奪っているのか、それとも術をこの世に現すために使用しているチャンネルを切ったのか。

現代風にわかりやすく言うならば、パソコンが動かない原因は本体の故障 or 電源がはいっていない or OS がウイルスによっていかれた or 充電がなくなった　　等々多くの理由があるのと同じで、術が消される要因はいくらでもあるのだ。

「ならば……」

真っ直ぐ来るのだから、さっと避けねばすむことである。忍者の投げるクナイはたしかに速いが、吉継に回避できないスピードではない。

クナイがあたらないように身体を右にずらすと、そこには小さなつむじ風が陣取っていた。

「刑部様、ごめんっ！」

佐助だった。

白い衣を紅葉のような小さな手が掴み、握り締めているクナイの矛先を蝶の主に向ける。この絶妙なタイミングでは通常ならば相手に黒き鋼の牙をつきつけ、引き裂くであろう。

しかも鋼の表面に色づく薄い朱は、おそらく毒。かすり傷でも相手の動きを止めてしまう、神経系を麻痺させるものを塗りこんでいるはず。

「ふう。危ないね……」

頬ににこりと笑みを浮かばせると、吉継の身体が四散する。

「えっ！」

分身。

「影、だよ。佐助君」

吉継の容だったものは黒い蝶が密集して出来た影だった。

形体が崩れ、黒い蝶の集団は蛇のような動きをし、四方八方にうねる。

「式たちを僕に見立てることぐらい、容易いことさ。と、いつでも密度を高めておかないと形がいびつなことが多くてね、欺くのが難しくなっていく。戦のときは竹林で待ち伏せするとか、遠くでうご

めくぶんなら結構有効だよ」

たしかに影といえども人の形をしたものが無数存在していれば、戦局では混乱するだろう。

「それに……君を欺くなら、ね……」

蝶たちが再び集束していく。

吉継の影となり、同時に何体も現われ 佐助を中心に円で囲い込むように動く。

「うわ、区別できないです」

正直な、佐助の感想である。

「これでも初手のものの百分の一の精度しかないのだよ。人の目はとつくに判別できるけれど、君は違う」

佐助がこの状況で不利になる理由は、普通の人とは違い彼の視力は霊視で補われているためだ。

ここに絵画があるでしょう。人から見た『本物』と『本物そつくりの贋作』は、見た目は同じでも佐助にとっては書き手の質、その絵に染み込んだ作者の魂の色が違うのですぐに見破られるが、『本人が描いた、まったく違う作品』の題名を分別することができない。

例えるならば ゴッホの『ひまわり』と『自画像』の絵があるでしょう。仮に左に『ひまわり』、右に『自画像』をおく。まったく違う絵の作品なのだから、我々はすぐどちらが『ひまわり』か、と問われれば、左と答え、指でさせるだろう。

だが、佐助は左右どちらに『ひまわり』が飾られているのかわからないのだ。

同じ作者に描かれた作品のため、染み込んでいる魂はまったく同じ。

もう少し高度に、繊細に作品を霊視することができれば、描かれた時期や精神状態で絵の題名を判別できるかもしれないが、かなり時間を要することになる。

それと同様で、佐助は術者によって作られた本人と魂が同じ質を持つもの（ここでは影）を区別するのは難しいのだ。

「そういうことで、咄嗟の判断を必要になるときは特に気をつけないといけないね」
ちりりと、衣についた鈴の音がなると、影たちはすべて分裂し、蝶の姿へと戻っていく。

「影を利用した分身は一对一ではまず使わない。敵を混乱させて冷静な判断力を失わせるための術だからね。あ、逃げられるときも注意するように」
信繁を主にしているのならば、この先、佐助も退魔師として彼の手伝いをすることになる。ならば、術について教えていても損はないのだ。

（すべては太閤様のために）
威光を示すために必要な駒を育てなければならない。そして従わせなければならない。

佐助には少し酷かもしれないが、身をもって力の差を実感してもらうおう。

「さて、僕からの直接攻撃はちょっといやらしいらしいよ。大体僕

と練習試合をするといわれているから」

手を掲げ、うねっている蝶の一部が吉継のもとに集まっていく。

「気をつけてね、佐助君」

シヤナリと槍を構える姿勢をとる。するとその左手に蝶の主の三倍はある長い棒状の、モノが握られている。

「槍、いや、どちらかというと薙刀？」

「そうそう。しかも、念で出来ているから従来のもの比べて軽くて丈夫だよ。それに……」

中庭にあった石燈籠をためらいもなく一刀両断にする。

「この通り、切れ味とスピードも保障されている」

おゝパチパチパチ。

思わず佐助は拍手を送った。

「と、いつでも、僕にとつては、切れ味は二の次。どちらかというとスピードがあるほうがいい。手数が多いほうが僕にはチャンスがあるから」

「それはどうして……」

佐助はじつと切られた石燈籠をみる。

するとそれは黒い何かに侵食されていくように、朽ちていった黒い蝶が、貪るように、その羽で小さい傷つけていったのだ。そして最後、蝶は吉継ももとに戻ってくると同時に細かな傷がミシミシと音を立て、粉々に破壊した。

「そう、一傷でも蝶が入り込む。そして相手の霊的なエネルギーを餌にどんどん増殖して、仕舞いに宿主を破壊する」

「うわぁ……呪われた武器なのですか、それ」

デロリラ、デロリアリン。

えげつない呪いに忍者も思わず顔を歪めた。

「……僕としては、どちらかというと追加攻撃のほうだと思っけど」
蝶の動きによってさらにダメージを受けるのだから。

「ああ。でも安心していいよ。君の場合は、そうだね……。この攻撃用の蝶にエネルギーを食われる前に蝶の餌になる霊力の供給を一端ストップするように破邪の力を使って、尚且つ僕の側から10町（約1キロメートル（小数点切捨て））離れればいい。そうすれば蝶はかつてに消えていくからね」

「……偵察用と分別されているのですか」

「いや、この薙刀を構成するときに使っている蝶は僕自身が作った式がメインだから呪詛自体は弱いのだよ。闇夜の蝶は僕と意識を共有できるならどこに行っても構わないって言うけど、つまらないものを斬りたくないって言うていてね」

常夜の寵愛を受ける敦賀城主は少し照れながら、蝶の種類の違いについて嬉々として述べる。それはうちの愛犬や愛猫についてべらべらと語るペット自慢の方々を同じものだった。

「さてと、長話はこれぐらいでいいかな。さあって、佐助君、どう動く？」

吉継が動き出す。

鈴を鳴らし、向かってくる。

「あう」

こうなれば、小柄な己は避けることを第一に考えるしかない。身軽で、修行によって培われた強靱な羽根がある身体を駆使して、吉継の薙刀の先から逃げた。

「まあ、それはそうだね。でも、僕の武器は薙刀だよ」

「ですよ〜」

手の中で柄を回転させる。

それだけで、刃の向きが変わり、佐助の右肩目掛けて突進してきた。飛び跳ねて逃れるのは不可能。だから地面につき、身体を伏せてしまった。

「あ、しまった！」

「忍者の悪い癖が出たね……」

即座に吉継は薙刀をくるくると回し、地面すれすれで払うように動かす。

足を斬る。これは薙刀の基本的な攻撃方法である。

剣術では珍しく、現在の剣道では足を打つのは反則なので、ピンとはこないかもしれないが、実戦では足を狙うのは悪い作戦ではない。身体の中から離れている足はどうしても防御が甘くなるし、切り裂かれてしまったのなら、足に力を入れることが出来なくなり、逃げ出せなることはもちろんのこと、攻撃だつてできなくなる可能性が高い。

さらに、足を斬ったのならばそのまま放置したとしても、救護や治療するのに時間がかかり、うまくいけば一軍の動きを鈍くさせることもできる。室町時代、まだ鉄砲がそんなに普及していないとき、薙刀はかなり有効な武器だったのである。

「う！」

案の定佐助の足に黒い刃が迫る。薙刀の試合ではすね当てを当てているので大事に至らないのだが、これはまがりなりにも真剣だ。さらに悪いことに素早さをウリにしている佐助は、すね当てという

ものを装備していない。足の動きを妨げるものは極力避けているのだから忍者としては常識の範囲なのだ。けれどもそんな特殊な職業の常識なんか、現実の中ではいくらでも飲み込まれてしまう。

時間がない　足に力を入れるのは……。ならばと、佐助は力んだ。ただし、足以外を。

ガキンツ。

火花が散る。

蝶の刃と黒鋼が受け止め合ったためだ。

「ほう。こうくるか。流石、猿飛という名を与えられただけのことはある」

佐助の破邪の力によって、蝶の羽が消失していく。

「俺も、こううまくいくとは思いませんでした」

佐助は両足を空に掲げ、地面には手をつかせていた。

ようは逆立ちをしているのだ。そして薙刀の刃を手首で受け止めた。そこは手甲で守られ、しかもその中には棒手裏剣が仕込まれているので、刃の一振りならば衝撃はあるが、傷がつくことはない。

佐助が操る黒鋼は彼の破邪の力が事前に込められているものなので、呪術を消失させることができる。

「ていつ！」

さらに佐助は右手に力を入れ、手だけで身軽な身体を回転させ、左手に瞬時にクナイを取り出し、吉継に向けようとする動きを見せた。

（流石にこれをされたら……避けられないな）

危機、だというのに吉継の顔には笑みが浮かんでいた。

業病により体が蝕まれていようと、歴戦の武将であることだけは変わらない。この程度の命のやり取りならば、何度も味わったものだ。

そしてその経験から、敦賀城主は次とるべき行動を即座に計測実現させる。

もつとも空気抵抗が少ないものがはやく動けるこの空間ならば……

吉継は薙刀を素早く持ち替え、石突で突く。

腹の下部、いや……。

見事な、金的だった……。

「がああああつああああああ！」

佐助の股間に強烈な一撃のあまりの痛さにのた打ち回った。

たしかに手や足に気を配ったためにたしかに隙だらけになっていた。それを躊躇なく攻め立てるため、刃ではなく、固い石突のほうを向けたのは、距離感を狂わせることと、常夜の蝶による打撃を与えるため。

つまらないモノたちを斬りたくない闇の蝶ではあるものの、吉継の

敵対者には容赦なくその力を出そうとする。

古から生存する純粋な力を蝶の姿にかえた闇たち。

それらとは斬るためではなく、『うつ』ために使用するという条件で吉継に纏うことになった。そのさい『うつ』とは、諜報活動によって駒の把握し将棋や碁のように戦略的に打つことと、薙刀の石突部分に変化し佐助にしたように物理的に打つことを意味した。

「もちろん、この子達の特異能力もえげつないけど……それをする
と、昔のユツキーみたいに生死の境をさまようことになるから、今
回は使ってない。普通に痛いだけですむよ」

「そ、それでも、刑部様あ、十分痛いです、えげつないです！」
佐助は股間を押さえ、涙目になる。

攻撃対象としての男性性器とくに睾丸を狙うのは武道、格闘技から
考えても、間違いではない。急所狙いは戦いの常識。

……だけど……思わず涙が出ちゃう、だって男の子だもの。

「……佐助……」

信繁も同情するように、そしてよく頑張ったとぼんぽんと佐助の肩
を優しく撫でた。

「タマは外しているから、大丈夫だろ」

くるりと吉継が回ると、鈴の音とともに薙刀は蝶へと戻り、敦賀城
にまた無数の蝶が飛び交う。

「それに、僕にここまでてこずらす。この手を使わせるまでいたった君は将来有望だよ、猿飛佐助君」

名を呼ばれ　にこりと微笑む蝶の主の姿は、あまりにも美しく、そして愛らしくて……どうしても憎めなかった。

むしろ、佐助の幼心に奇妙な高鳴りがして、吉継に褒められたことに嬉しくて舞い上がってしまいそうになる。

……その理由はほんのわずかで、燻っているものだった。幼い佐助はまだわからなかったのだが、自然にほんのりと色づいている頬だけが答えを表していた。

おまけ なぜなに質問コーナー

Qところで刑部様はなんで真田様を『ユツキー』と呼んでいるのですか（相談者・甲賀5歳）

A一番の理由は真田家の者、だからかなあ。ユツキーが元服する前の弁丸（人質）時代から、こちらの都合で退魔の仕事を受けてもらっていた手前もあって、ね。『海野六郎』というコードネームがあるわけだが……邸に呼び戻す合図には何か別なものを使用しようと考えた。そのさい際、信繁殿の今生の父、真田昌幸殿の『幸』という漢字に目がいつて……試行錯誤の結果『ユツキー』と僕が呼んだら、僕のもと（式の蝶のもとでもオツケー）に来るという暗号にしたのが始まりだったな。

まあ、そんなことからユツキーと呼んでいるけれど……僕はね、あだ名をつけて、呼ぶのが好きなので、今は普通に愛称。親しみやすいだろ。

ちなみに、僕や同僚である豊臣子飼衆にもそれぞれあだ名があるのだから、それはまだ秘密だ。（回答者：敦賀の蝶）

大谷「それに将来、信繁殿はユツキーとしてブレイクするような気がするのだよ」

真田「どんな未来ですか、刑部殿！」

真田信繁はこのときは思いもしなかったという。後に真田幸村という名で、戦国時代末期の悲劇のヒーローとして、日の本一の兵とし

て、世に広まるといふことを……。

第二話 常闇に愛されている術者ゝ力は使う者の心構えによって多彩の色を放つ

時代が時代ならば児童虐待になってしまいましたが、あくまでも今回は練習試合です。大谷さんはまったく本気を出していません。少し肩を貸すぐらいという感覚です。自分の手はこれから佐助たちが対峙する妖怪がよく使ってくる手なのだから、知っていて損はしません。むしろ、経験が少ない佐助にとって見れば有難い教えだったのです。

ただ、過去に刑部とユツキーが試合をしたときは双方本気になってしまったため、終わったところにはお互いボロボロ。信繁は三日三晩生死をさまよい、吉継のほうも一日目は完全に布団の住民となり、何日かまともに動けなくなっしまいました。このWAKABA!では歳が近いこともあって、互いをライバル視していた時期もあったのかもしれませんが……たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5855p/>

戦国WAKABA！

2010年12月31日05時31分発行